

SWEET DREAM

written by HADEYA

1

まさかトリガーを引くとは思わなかった。ビビって泣き付く、に全財産を賭けていたんだ。ところが殺っちまった。そいつ……部下はトリガーを引いた。銃口をコメカミに宛がい。賭けは失敗に終わった。部下は死んだ。ロシアン・ルーレットで死んだ。目の前で。勿論、俺は逃げた。俺の名は山崎永輝——一人呼んで、殺しのザキ。

*

ザキは浅草をウロついていた。逃亡生活が始まって三カ月。首に賭けられた懸賞金は三千万円。誰も彼もが懸賞金を狙っている。殺したくてウズウズしてる。俺が浅草をテリトリイに選ぶのには理由がある。元警察官にとって筋者しかいない街は人脈の宝庫だからだ。取り分け、マル暴に所属していた俺にとって浅草はビバリーヒルズのようなものだ。

一体、どうやって生きてるのか。ヒモ生活だ。雌犬を働かせ、稼ぎで凌いでいる。どんな女も俺の為なら喜んで股を広げる。商売女に限った事ではあるが……。

そんな訳で悠々自適な逃亡生活を送っている。まさか死ぬ事になるとは思わなかった。今宵、俺は死ぬ。甘い夢を見て死ぬ。スウィート・ドリーム……。

2

-十二月初旬。風俗店へ行く事にした。俺が通う風俗は普通の風俗ではない。会員制の一風変わった風俗で楽園——悪の華に辿り着いた者しか入る事が出来ない筋金入りの悪党の溜まり場なのだ。

自販機で缶コーヒーを購入した。缶で手の暖を取り、コーヒーを飲みながら煙草を吸った。

美味しい煙草だ。煙草が美味いと感じる瞬間は三つある。一つは食後の一服。二つ目は糞をしながら吸う一服。三つ目は女と犯ル前の一服……テンパリ煙草。テンパリ煙草を決めながら浅草の下町を練り歩いた。その風俗店は閑古鳥の鳴く街外れにある。ガキもババアも寄り付かない下町の通りで道名は鴉通り。鴉と言う名の通りカラスがたくさんいる。ゴミを漁るカラスを見ていると人類滅亡の錯覚に囚われた。どいつもこいつも鳥に食われちまう。カアカア鳴きやがる、こいつらは人類の敵だ。空き缶をカラスの群れに投げてやった。カラス共は黒い翼を広げ、一目散に逃げて行った。ざまあ見やがれ。

目的の風俗店〈優雅〉へ着いた。看板はない。シャッターは閉じている。秘密の裏口が在り、そこから入店する仕組みになっているのだ。裏口を知る者だけが入店を許される。そんな訳だ。

裏口の前に立った。何の変哲もないスチール製のドアで小さなサイズ。インターフォンもなく鍵も常に開いている。入りたければ勝手にどうぞ、と言わんばかりに。

ドアを開け、暗い階段を地下に向かって降りた。シェルター構造の地下一階には別のドアがあり、そこが入り口となっている。ドアを開け、俺は〈優雅〉に入店した。

*

店内はストロボが効いており、前衛的で最先端の西洋クラブを思わせる。ウイスキーを呑みながら店員が来るのを気長に待った。やがて女が現れた。年端も行かぬ……十二歳前後と思われる半裸の女が。

ピンクのブラ、黒のパンティ。チグハグな下着はマニアックなフェティシズムを刺激する。髪型はボーイッシュなショートカットで胸は申し訳程度の大きさ。目はパッチリ大きく、鼻と唇はスラリと細い。

キュートな小悪魔。

そんな印象の子だった。煙草をくわえた。透かさず、その子が火を点ける。

「ありがとう」

俺は言った。彼女の目が恍惚と輝く。街角のカラスを思わせる眼差しだった。

「初めまして、文美凜です」

「アヤミリン。変わった名前だね」

「座っても良いですか？」

「どうぞ」

凜は隣のカウチに腰掛けると密着して来た。優しく俺を抱き、耳元で、そっと囁く。

「どのコースになさいますか？」

正面を見たまま俺は告げた。

「スペシャル・VIPコースで」

「かしこまりました」

凜が俺のチノパンのファスナーを下げた。勃起したペニスを口に含み、優しくチョロチョロと舌先で俺を弄ぶ。相変わらず俺はウイスキーを呑み、煙草を吸っていた。絶世の十二歳／チグハグな下着／行き届いたサービス。俺はスペシャル・VIPコースが気に入っている。気に入らない男がいる訳ない。

そんな傲慢な奴がいたら、その場でブチ殺してやる。

「警察だ！全員、その場で大人しくしろ！」

-怒声が轟いた。ガサ入れ——風営法違反だろう。或いは懸賞金が目当てか。何れにせよガサ入れが行われた。俺は店の売りである秘密の抜け穴から店を出た。ゆっくり落ち着いて外へ出る。

射精したい。止むを得ず、ストリップ映画館へ向かった。時刻は十四時を回っていた。

3

そんな感じで一日を過ごした。フラフラ目的もなく。ロシアン・ルーレット、鴉、優雅のスペシャル・VIPコース……飛びきりエロチックな現実世界を徘徊しながら。ここから事態は急転する。夜になったのだ。

居酒屋に俺はいた。安い秋刀魚を割り箸で突き、日本酒を啜っていた。瞬きをした瞬間、異変が起きた。目を閉じ、瞼を開けると世界の様相が一変していたのだ。そこにいたのは悪魔だった。人間の姿をした悪魔……懸賞金に目が眩んだ猛者共。突然、彼等はテーブルを引っくり返した。血相を変え、俺を囲む。全員、割り箸……武器を手に入れているではないか。

「三千万は俺の物だ」

一人の日本人が言った。

「ワタシノモノデス」

アメリカ人が言った。

「誰にも渡さねえよ」

俺は言った。言うなり割り箸で目の前にいる男の左眼を串刺しにしてやった。そこから先は滅多刺しの滅多刺し。胸に割り箸を刺され、意識が飛んだ。

*

目が覚めるとドブ川にいた。臭くて汚い茶色の川に。うつ伏せの態勢で俺は倒れている。全身、ズブ濡れで頬に当たる水がヒンヤリ心地良い。

視界がくっきり鮮明になった。目の前に赤いハイヒール。真っ赤な、真っ赤なハイヒール。腕の感覚がない。従ってマル暴時代に盗んだ銃を手にする事は出来ない。ハイヒールが動いた。ガサゴソ音がする。スーツの右ポケットから拳銃を盗む音。

どういう事が把握した。レッツ・ダンス。

暗闇で踊ろう。俺と踊ろう。君のウエストに手を回し、音楽に乗って軽やかなステップを刻もう。今夜は二人きりでいよう。俺と君の愛で死を突き離そう。俺達なら出来る。俺達なら。

もし君が結婚を望むなら受け入れる。全身全霊で君を守って見せる。だから俺と.....今夜.....二人きりで.....。

場面が変わった。俺とミセス・ハイヒールは高層ビルの屋上にいた。貴方と死にたいの。死ねば私達の愛は永遠だから。分かったよ、スウィート・ハート。今、ここで君と死のう。一步、足を踏み出し、ビルから飛び降りよう。けど、これだけは約束して欲しい。俺以外の男は警戒しろ。だって君は余りにも、余りにも美し過ぎるから。俺は君を愛してる。君が俺を愛する以上に愛してる。キスするよ、マイ・ダークネス。

銃声が出てザキは死んだ。深夜、暗黒の闇が広がった。(ア)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872